

次を秋とし、其次を冬春とするのである、一年には大抵十二回採
收することになつて居る、夏の第一回採收葉を頭水夏と稱し、第
二回採收葉を二水夏と稱し、共に佳良品として居るのである。

▲包種茶（臺灣名）包種茶（パウフェンチエ）（異名）秀英、包種、茉莉包種、樹蘭
包種、黃枝包種

包種茶は、烏龍茶に、秀英花、茉莉花、樹蘭、黃枝花の四種中、
何れか一種を混入し、其花の香氣を移して、乾燥せしめたるもの
である、其製法たる、先づ烏龍茶を八時間ほど乾燥せしめたる後、
相當の花と混淆して積置き、十時間前後を経たる後、花を除き、
再び八時間ばかり焙爐にて乾燥せしむるものである、其使用の花
に依つて種々の異名も生ずるのである。

本島にて包種茶の製造を始めたのは、光緒七年、即ち我が明治十四
年にして、僅かに三十年に過ぎないのであるが、今や本島輸出物
中、主要の位置を占むるに至つたのである、其需用地は、布哇十
中の八分を占め、其他は安南暹羅等に輸出するのである。

▲婆羅密（臺灣名）婆羅密（ボラロオゼツ）（異名）優鉢曇。曇伽結樹。刀生果。
天婆羅（科名）桑科。一に蕁麻科

婆羅密は本島中元阿緞 應下に産する常綠喬木で、葉は倒卵形全
葉である。

花は小形花多數相寄りて長楕圓形を爲し、果實は球形の多花果で
ある、麵包樹の實の丸いのと見れば違ひない、そして其大なるも
のに至ては殆んど人頭大に至るのである、其質及味とも殆ど麵包

果と同一であるが、味は稍劣るのである廣東志に、

種生五六年。至_リ徑尺。削_ニ去其抄_ヲ以_ニ銀針_ヲ釘_ニ腰_ニ即結_フ實_ヲ。成實乃花、然常不_レ作_レ花。故佛氏以_ニ優鉢曇花_ニ爲_レ難_レ得_ル。每樹多至_ニ數十實_ニ。自_レ根而幹。而枝條。皆有_レ實。累々疣贅。若不_レ實。則以_レ刀砍_ニ樹皮_ニ有_ニ白乳_ニ湧出_ル。凝而不_レ流。則實_ニ二砍一實_ニ。十砍十實_ニ。故一名_ニ刀生果_ニ。熟以_ニ盛夏_ニ大如_レ斗。重至_ニ三四十斤_ニ。皮厚有_ニ軟刺_ニ。礪_レ如_ニ佛頭_ニ。

とある、砍るがためかごうかは分らぬが、兎に角大樹の横腹などに突兀して大きな實を結んで居るのは事實である、そしてそれが頗る趣味があるのである、諸家に。

婆羅門下樹亭々。香蜜成房子更馨。解是西來眞善果。十方俱

奉佛頭青。(孫元衡)

清果菩提繞室香。金包柑榴麗繁星。更燐斗大波羅蜜。礪_レ如_ニ眞同佛髻青_ニ。(張翥洲)

なご、吟じられて居るのは之れである、麵包果と共に本島珍果の一である。

▲蒲葵 (臺灣名) 蒲葵 (異名) びらう (科名) 棕櫚科

蒲葵は支那原産の常緑樹にして、枝葉果實共に棕櫚に酷似して居る、其稍々異なる所は棕櫚の葉の裂片は尖らされども蒲葵の裂片は一枚毎に鋭く尖り、且つ全體に於て棕櫚より雄壯なるにあり、葉を晒して笠、團扇などを作る、所謂蒲葵扇なる物は即ち是である。

▲光榔 (臺灣名) 光榔子 (異名) つぐくろつぐ、蘇鐵椰子、糖榔、

〔科名〕 棕櫚科

一八八

光榔は本島山地至る所に野生し、椰子に似たる木本にして、高さ三丈餘に達するものもあるが、大抵は一丈前後である、葉は多数の小葉より成れる羽狀複葉である、花は單姓で、雌雄花共一株に生するのである。

果實は殆ど檳榔子の如く、大なる穗狀になる、其肉穗花序の汁液からは、砂糖が出来、幹の髓部からは澱粉が出来るのであるが、本島人は葉を以て箒又は繩を作るに過ぎないらしい、實は六月ごろ熟するのであるが、土人は此實の多少を以て年の豊凶を卜し、若し其實にして多き年は豊年として居るのである、川上技師は曾て臺灣の地方代表景色植物なるものを選ぶに當つて「鷺鑿鼻の杓

榔」なる一項を擧げて居るが、實に南部に至ると全山此木ばかりの處が多いのである。

▲榕樹〔臺灣名〕榕樹ヨシナユウ〔異名〕がづまる〔科名〕桑科

榕樹は楕圓形平滑全葉常綠喬木で、高さ十五尺に達する偉大なものである、桑科では一寸想像が付かぬほど變つて居る、幹からは盛に氣根を生じて、人馬も通り抜けられるほどの根上りになつて居るものもある、氣根盛んにして、ごんな礫确瘠地にても、成長するので、能く海岸の防風樹などに植ゑられて居るのである、果實の構造は無花果に酷似して小さいのであるが、總花托の下に小さい蒂を具へて居るので、一寸見ると豆柿の看がある。

氣根が地上に蔓るので、庭樹にはならぬが、元來植樹思想皆無に

して、何等の大木もなき本島平原にも、此の頑強なる榕樹だけは、所々に自生の大樹があつて、夏日炎天燻くが如き際には、苦力、行人等、能く其蔭に入りて暑を避け涼を入れてるのである。

鳳梨に根も掛けすれの榕樹哉

素 濤

▲赤榕 (臺灣名) 赤榕 (異名) 烏松、烏屎松、あかう (科名) 桑科
赤榕は榕樹の一種で、其枝葉のやゝ赤色を帯び居るのを差なりとするのみである、尙ほ普通の榕樹に比すれば、一層樹根の盤屈する木である、春季發芽のころ榕樹より一層盛んに實を結ぶ、詳細は榕樹の條を参照すれば明かである、唯榕樹と全く異なる所は冬季全く落葉し、春に至り一時に發芽開葉するの一事である

▲林投 (臺灣名) 林投 (異名) たこの木。えらん。榮蘭。林茶。

葵。兜樹 (科名) 榮蘭科

林投は本島至る所の原野に自生する悪木にして、枝葉は略ぼ莖菜に長大なる幹を付けた形である、花は小形單性にして、雌木は葉腋に莖菜然たる實を結ぶが、食ふに堪へぬのである。

此木はたくましき氣根を生ずる木である、殆ど氣根のみにて活きて居る木も多い、幹は種々の樂器材などし、葉は籠又は帽子などにする、有名なる臺灣バナマ又は林投帽と稱するものが是れである、土人はよく水牛除けの畑園などにして居る。

▲鳥心石 (臺灣名) 鳥心石 (異名) をかたま、廣心樹、黃心樹 (科名) 木蘭科

鳥心石は本島北部の森林に蕃殖し、高さ五十尺に達する常綠樹に

して、葉は長楕圓形の全邊厚肉で、略朴の木の如くである、木蘭に類する帯紅色の小白花を付けるが見るに足らない、多少觀賞用にもするが、多くは建築用及び器具材に供するのである。

▲島百日紅（臺灣名）九芎木（科名）千屈菜科

九芎木はサルスベリ即ち百日紅の一種にして、本島隨所に多く、殊に臺東の山林は殆ど其の四分は此の木なり、といふ（臺東殖民地豫察報文）

▲龍舌（臺灣名）龍舌草（異名）萬年蘭。龍舌蘭（科名）石蒜科
龍舌草は山野に自生する多年生の一大草にして、葉は縁邊に銳利なる針狀の巨齒を有し、尖りて五六尺に達するものがある、發生後數年にして花を着けるのであるが、花は葉叢の中央より、大なる筍の如き莖を抽きて、丈餘に至り、多數整齊なる聚繖花序花を着けるのである、高さよく三丈に達するものあり、恰も枝の整然たる五葉松を見るが如く、雄姿堂々、眞に比類なきものである、一旦實を結びたるものは、秋に至りて莖葉共に枯死するのである、一株にしてよく一大叢をなす故、小庭には植ゑられぬが、洋館又は官衙などの大庭園に植ゑれば頗る雄壯にして、趣味がある、是又熱帶趣味を發揮すべき好材料である、内地には、龍舌草と書いて「たつのした」と訓む水草があるから混じてはならぬ。

▲夏の新米（臺灣名）新米

臺灣は二期作であるから、第一期稻は之れを早稻と稱し、其收穫時期を頂冬又は早冬と稱し舊六月中に刈入れを爲すのである、隨て

第一期稻の新米は夏となる、之に對して、第二期稻を晩稻と稱し、其收穫期を晩冬又は下冬と稱し、舊十一月に收穫するのである。

▲山藍（臺灣名）山菁（ソアンチイ異名）琉球藍、馬藍、菘藍（科名）爵牀科
山藍は基隆宜蘭地方に産する採藍植物の一にして、左の如きものなり、山藍は琉球諸島に多く栽培するを以て、琉球藍、漢名馬藍と稱す。植物學上爵牀科に屬し、（中略）一種の草木にして普通收穫期に於て、其の草丈一尺乃至一尺五寸あり、莖は九節を有し、莖節部の周圍は著しく隆起膨大し、恰も蓼類若くは鳳仙花類の莖節と等しく、此の節より數多の枝極及び葉を生ず、葉は互生若くは對生にして、單葉に大小ありと雖も、大葉は幅一寸五六分、長三寸六分に過ぎざる長楕圓若くは稍菱形をなし、

純鋸齒ある葉縁にして、葉の基部及び先端部は何れも多少の鋭尖をなし、宿根作物なり（中略）山藍は自然に任せて收穫を行はざる時は、十二、一月頃（陽曆）に至れば其の枝極上に美麗なる稍唇形なる淡紫花を開き、結實するものあるも、發芽力なしと云ふ。

山藍は十月頃（陽曆）莖の枝極の多く分出せるものを、其の莖上凡そ五六寸の長さに三節を含めて剪枝し、之を苗とし、畑地に移植し、適當の手入を施す時は、翌年六七月及び十一月頃（陽曆）の二回收穫をなし得可し。

内地山野に自生せる大戟科の山靛は國語にて同音なれども全く異なるものなり。

又地方により田菁を大菁と云ふ處ありと云ふ。(臺灣重要農作物
調査報告)

▲芽生姜 (臺灣名) 薑芽 (異名) はじかみのめ (科名) 薑科

生姜は本島の埔地一帯に産する宿根草本にして、莖の高さ二尺許、
根莖の上部は紅色を帯び、葉其他全體の形狀、茗荷に類し、根塊
に芳香と辛味とを有する食用植物である、本島にては盛に藥種に
使用するのである、尙ほ海外にも盛に輸出するほど産出豊富なる
がため、夏の初めになると、其の若芽だけを掘つて賣出すのであ
るが、純白の上に紅色を帯び居り、頗る韻致に富んで居る。

▲樟 (臺灣名) 樟樹 (異名) くす、赤樟、犬樟、樟楠 (科名)
樟科

樟の葉は卵形にして尖り、著しき縦脈三條を有する互生葉の偉大
なる喬木にして、秋に至り、小形黄白色の花に黒色球形豌豆大の
實を結ぶのである、花は殆ど見るに足らぬ、此木は内地に在ては
風致木として社寺境内などに植ゆるのであるが、本島には古來各
地に繁殖して居るのみならず、樟腦原料として世界に名高いので
ある、其の最も腦分に富むものを赤樟と稱し、各地に於て専ら栽培
に盡力して居るのは之れである。

▲蓖麻 (臺灣名) 蓖麻 (異名) 唐胡麻、からえ、からがしは、(科
名) 大戟科

唐胡麻は本島山野至る所に自生し、高さ六七尺に達する越年生草
本にして、莖は直立中空にして、竹の如き節あり、皮には白き粉

を付けて居る、葉は互生にして一尺ばかりあり、九岐に分裂して且つ鋸齒がある、梢上に黄白花を蒴開すること鈴の如し、實は毬にして中に二三の子粒を含む、其實より油を製す、蓖麻子油は之れである、之れがために栽培するものもある。

▲愛玉 (臺灣名) 澳嶼 (異名) 愛玉子。愛玉枳。玉枳。玉腰子。
天放枳。赫轟子 (廣東語) (科名) 無花果科

愛玉は、いたびかつらに酷似せる野生の纏繞植物にして、其實は外見内部共に無花果に彷彿したものである、夏季其の成熟したる所を採り、皮の一部分を残して二つ割となし、それを日に乾かすと、外皮が緊縮して非常に反り返るので、外皮は却て内面となり、丁度蛤殻の形になる、そこで土人は海の蛤即ち澳嶼と名けて居

るのである、土人は其微細なる核を落して、布に包み、水に浸して汁を揉出し、之れを寒天の代用にするのであるが、其の揉出した汁は、別に煮ることもせず、揉出したまゝ置けば、忽ち固まりて寒天になる、土人はそれに直ぐ砂糖を付けて食すのだから、誠に便利なものである、のみならず臺灣の外に見ることの出来ない珍らしいものである、之れと効用を同じくするものが尙ほ一つある、仙草と云ふのである、此方は高山に登ると澤山あるので、土人町に這入ると寒天にして澤山賣つて居る、價も安い、鼠色をして居るので餘り珍重するに足らぬ、それと違つて愛玉の方は純白になるので、頗る珍重される、價も亦高い。

秋の部

二〇〇

人事

▲乞巧會(臺灣名)七娘媽生(異名)乞巧奠、願ひの糸

七夕は、臺灣にては之れを乞巧節と稱へ、俗に七星娘媽の生日と云うて居る、此夕、家々の女兒等、各卓を庭上に持出し、果物などを供へ、月下に香を焚いて禮拜し、以て織女の巧を授けられんことを願ふのである、そして糸を取て月下に針の孔に通し試み、其の能く通し得たるものは、即ち巧を授かり得たるものとするのである、之れを乞巧奠又は乞巧會というて居る、臺灣人の七夕行

事は唯之れのみである、決して星逢とか、星の戀とか云ふ様な意味は毛頭今日では持て居らぬのである。

ところが、之を内地にして見ると、七夕と云へば、何處でも必ず七夕竹を押立て、専ら星逢とか星の戀とかいふことを主として祭るのである、よしんば多少乞巧の意味ありとするも、并はホンの附けたりに過んで主とする所はやはり星逢にあるのを七夕關係の季題は凡そ百もあるが、何も星逢のみを主として居て、乞巧の事は殆ど忘却されてるから、旁以て此處に之を特記して置く。

▲施餓鬼(臺灣語)普度

臺灣には七月にも盂蘭盆會なるものがない、其代りに普度と稱するものがある、

普度の目的とする所は、既に其文字自身が示して居る通り、世間一般に存在する無縁無祀の孤鬼を普く濟度するといふに在て、決して我内地の魂祭の如く、主として己れの先祖代々の靈を祭るといふのではない、恰も内地に於てする、彼の村施餓鬼町施餓鬼などいふのと殆ど同一なのである、隨て其場所の如きも、銘々勝手自分の家に於て修するのでなく、各街庄人民等各一町一村づゝ共同して一箇所乃至數箇所の檀那寺に於て修するのである。又其時日も盆會の如く七月十三日より十六日迄、四日間修するのでなく、七月初旬より同月末日までの間に於て、或一日を限りて盛に供養するのである、例へば某庄は某日、某街は某日と定め、若くは縊縛の如き大市街にして檀那寺の二三箇所もある所に在つ

ては、龍山寺は十三日、祖師廟は二十日と定め居れるが如き即ち是れである。

愈其當日となると、寺廟の前には結綵をかけ、燈籠を吊るし、羊豚雞鴨を以て種々の山水風景人物器什などを作り、且つ五色の色紙を以て冥界冥器などを作る、時として本尊前が狭ければ廟側又は廟後などに作る所もある、其盛なること本尊の靈像も埋めらるゝばかりである、そして夜に入れば、衆僧讀經し兩々相待ちて、一般無縁無祀の孤鬼を濟度するといふのである。

昔しは此衆僧の讀經終ると同時に、千百の群衆一時に競起りて、此等排列の牲肉を掠去るの風があつたが、甚しく紛争して、爲めに死傷を出すに至たので、それだけは劉巡撫の時代に禁せられて

仕舞つたけれども、多少其遺風を存して、時に依ると今尙之れを争奪せんとするの徒があるので、豫じめ門前に矢來を結うて其來襲に備ふる所もある。

此夜、街上各所に於て盛に芝居を爲し、又民家に在ては各家互に種々の料理を作り、競て人々に饗應せんとして居る、之れも普度の意に外ならぬのである、けれども自家の先祖代々の靈を祀らんが爲に、家内に魂棚を設け、又は僧侶を招じて讀經せしむる等のことは一切せぬのである、内地の施餓鬼と見れば殆ど相違はないが、種々の點に於て趣味を異にして居から別に一題材として掲ぐ。

施餓鬼棚我が影法師も哀れなり

一映

▲燈籠會(臺灣名)放水燈(異名)水燈會

放水燈は、内地にては之れを水燈會と云ひ、臺灣にては之れを放水燈といつて居る、昔しは燈籠を水に流したものだからして、斯う云ふ名前が付いて居るのである、して見ると之れは七月十六日に、山城國宇治郡黃蘗山萬福寺に於て執行するといふ、彼の水燈會と同一のものであつたのが、今では其儀式迄がらりと一變してしまつて、例の大框燈籠を押立て、月琴胡弓で囃立てつゝ各街庄を練り歩くだけであるから、之れを水燈會又は放水燈など云ふては、名實相副はないことになるのである、今日から云ふならば、やはり燈籠會といふのが一番穩當なのである。

句を作る場合にも、放水燈といふのは一の固有名詞であるから、之れは何所へ使つてもよからうが、之れを形容する場合には、燈籠

を水に放つとか、燈籠が流れ去るとか云ふ様なことを云ふことは出来ないのである、斯くの如く其意味を異にして居るから、特に一季題となる。

▲竈神祭(臺灣名)灶君公生ツウケンケシイ

竈神は一に灶命司君と稱し、張單字は子郭なる人を祭つたものであるが、其誕生日、八月三日なので、各戸に於ては、此日竈前に供物を供へ、焼金爆竹などを放つて之れを祭るのである。

▲廣澤尊王(臺灣名)廣澤尊王生コンナヤクツンテンシイ

廣澤尊王は泉州郭姓の人を祭つたものである、王は八月二十三日に降誕せられたといふので、此日に祭りをするのである、當日は廟内には牲體香燭を供へ戲を演じ頗る雜鬧を極む、其本山が泉州

の南安縣鳳山寺なので、臺地の信徒中には、此日同本山に參詣するものも澤山ある。

▲臺灣神社祭(臺灣語)臺灣神社祭(異名)臺灣祭、諸祭、圓山祭タイワンシンシヤアチエ

臺灣神社は臺北廳芝蘭一堡劍潭山上に鎮座まします一の官幣大社である、祭神は大國魂命大己貴命少彥名命の三神と北白川宮能久親王殿下との合祀である、其の初めて此地に鎮座ましますは明治三十四年十月二十七日であるので、爾來十月二十七日を以て鎮座記念日とし、翌二十八日を以て祭日として居る(新曆)

爾來年々鎮座紀念日には臺北廳長及び各學校、各團體等の參拜あり、翌祭日には臺灣總督奉幣使として參向し、殿前祭典を舉行せられ、官民盛に參拜するのである。

此日、臺北三市街の人民等は、種々の餘興を催すのであるが、土人内地人混合の祭典だけに、餘興も内地もの臺灣もの、混合であるから頗る奇觀を極めて居る、但し民間の餘興は本祭蔭祭など、稱して、何時からか隔年に催すの習慣と成つた。

俳句などには臺灣神社祭では、餘りに字も多いし、無雅ともある、そこで此祭には、殿下に因縁深かりし甘藷を奉ることになつて居るので、俳人は之れを諸祭とも呼んで居る。

▲刈上祭(臺灣名)刈稻祭(異名)孝土地

稻刈の日、福德神に米篩目と稱する果子及び牲醴等を供へて祭りを爲すのである。

▲粃乾場(臺灣名)稻埕

臺灣の稻は落ちがよいから、刈るそばから打落し、それを直ぐ其近所にある粃乾場に持出して地上に直乾ジカギしにするのであるから、廣い耕地には所々に其乾場がある、それが即ち稻埕である、多くは田藁に附いて居るのであるが、稀れには稻埕のみ設けてある所もある、今本島第一の繁昌地たる大稻埕の如きも、昔しは淡水河畔に設けありたる大なる稻埕に、段々家が立ちて、遂に大市街を爲すに至つたのであるから、今尙ほ其名を存じて居るのである、埕は庭の意である。

▲田藁(臺灣名)田藁(異名)收納小屋

内地には稻小屋又は田の庵と稱し、野獸の田害を爲すものを防せぐため耕地中に一時的に作るものがあるが、田藁はそれとは違ふ

漢人移住の當時は墾戸即ち大地主なるものがあつて、一手に土地の開墾許可を受け、其地内の大小に應じて幾つかの農事小屋を立てて農具種子等をも備へ、土地と共に小作人に貸與へたのであつて何れも土地と共に永久的且つ居宅を兼ねて居るのである、其慣習今に残りて、田藁は何れも土地と共に地主より借り受けて小作人の居宅となるのである、が其目的とする處は農作物の收納にあるを以て秋の一題材となる、中には自地自耕者にして多少大なる構をして居るものもあるが、多くは構造簡單にして僅かに膝を容るゝに過ぎざる小屋立で、頗る田園趣味を帯びたものである。

▲稻打桶(臺灣名)揀桶

揀とは押すの意である、臺灣では稻を打つて大きな盪狀の桶を田

の中に据へ、其中で稻を打落すのである、そして一ヶ所打つて仕舞ふと稻の刈溜めてある所に押して往つては其處で打つのである、そこで此桶を揀桶といふのである。

▲稻打幕(臺灣名)笨仔

稻を打つとき籾の飛出さぬ様に、稻打桶の三方に帆狀に張る幕である。

▲稻打臺(臺灣名)桶梯

稻打桶の中へ横に渡して稻を打付ける臺である、其構造恰かも梯子に竹を編付けたるが如き形をして居るからである、關東にてサナと稱する麥打臺と同一のものである

▲木藍刈(臺灣名)刈大菁。

其の詳細は木藍の條にある。

▲眞菰採り(臺灣名)抽茄白筍

食用蔬菜として、眞菰の心を探るのであるから秋の題材となる、詳細は眞菰の芽を参照せよ。

▲柿の澁拔(臺灣名)塩柿仔

柿は臺灣では俗に之れを红柿と稱して居る、之れは澁を抜くために必ず紅熟させるからである、近來内地人向きの澁抜柿を作るので之を青柿と呼ぶことになつた、内地で柿といへば、随分種類が多い、一寸見た所でも烘柿、白柿、胡盧柿、樹練柿、木淡柿、似柿、伽羅柿、圓座柿、筆柿、田舎柿、君遷柿、樽柿、澁柿、御所柿等幾らでもある、臺灣にも柿の木は至る所に見ゆるのであるが、

其種類は甚だ少い、一寸此中の田舎柿と稱するもの、一種ほか見えない、尤も形よりすれば、稍平らたいのと、眞丸いのと二種あるが、兎に角どちらも田舎柿たるを失はぬ。

田舎柿といへば、内地のも、形が眞丸で、他の柿よりは少し大きいが非常に澁いので、俗に「犬喰はず」など、綽名して居る所さへあるほどで、之れを食ふには、どうしても澁抜にするか、白柿にする外はないのである、臺灣でも矢張り之れを澁抜柿にするか白柿にするのであるが、其の抜き方が全く違ふ、即臺灣では略ぼ成熟したところを採つて、蒂の處に極めて少量の煉油を注し、四五日間蓄置きて紅熟させるのである、其紅熟した處は、極めて軟かになつて少しも澁氣がなくなる、そして此分は八九月ごろ、ま

だ極めて炎熱の盛なころから賣出すのであるから、恰も内地の水蜜桃などの如く、熱い日に氷冷しか何かにして用ゆるならば、是亦果物賞玩家の一餐を博するに足るものである。

之れは红柿を作る法であるが、澁を抜く方法即ち青柿にする方法はまた色々ある、安藤無音氏の調査したる所に依ると、全島中一番柿の多いのは苗栗であるが、同地では澁柿を龍眼樹の葉を煮た湯に入れて澁を抜き、又は澁柿を細かに摺潰ふし、それを澁柿にふりかけても抜き、そして其澁を抜いた所はかりくして誠に内地人の口に適する様に出て居る、何時頃から行はれて居る方法かは不明だが、土人は古來行はれて居る方法だといふて居る、兎に角臺灣特有の方法らしい。

今一つは例の石灰澁抜法である、之れは廣く中部南部共に行はれて居る、之れは恐らく内地の傳來であらうと思はれるから精しく云ふの必要はないが、序に其の名だけを擧げて置く云々。

動物

▲虱目魚(臺灣名)虱目魚(種屬)不明

虱目魚は種屬も和名も分らぬが、其形「このしろ」に肖て稍長筒形をして居る、此魚は沿岸に棲息して居る處を稚魚の内に捕へ、魚塋で養ふのである、其の成長頗る速かで四五月ころ一寸ばかりのものを捕つて入れると、秋には一尺位になるので、養魚には最も適當なのである、其の代り、肉が軟かで、脂肪が多過ぎて餘り

上等ではない

▲白帶魚(臺灣名)白帶魚(エトワビ)、たちうを(種屬)たちうを科

白帶魚は其形扁平にして長く、其狀太刀の如くにして白色である
秋、沿岸に来るの際、捲網にて捕るのである、大抵生魚にて販賣
す。

植物

▲金合歡(臺灣名)刺毬(イナリ)、異名(蕃蘇木)、消息花、牛角花(科名)荳科
刺毬は極めて小形なる羽狀葉にして、幹に刺を有する野生の小灌
木である、花は黄色にして相思樹花の如く、無數の莖糸もて毬を
爲して居るのである、冬季無葉の梢上に花のみを着けて居るのも

奇である、殊に其香氣峻烈なるを以て、人好んで庭園に栽培する
のである、府志に、

刺毬は花本にして、高さ數尺、刺あり、土人植ゑて以て籬とな
す、秋冬黄花を開く、小鈴の如し、細摺絨の如し、毎に露氣晨
に流れて、芬芳人を襲ふ、子を結べば豆に似て莢あり、其葉秀
整相次く、根は絳を染むべし、一に番蘇木と名く(台海采風圖)
消息花は、花、黄にして、形、洗耳器の如し、孫元衡が九日の
詩に曰く、黃菊難尋處士家、也無楓樹受霜華、海東秋思知多少、
爲問躑躅消息花(赤嵌集)

刺毬は身に刺多く、花、黄色にして菊に似たり、而して小小之
れを消息花といふ、又牛角花と名く、其刺相偶ふて牛角の如き

を以てなり(諸羅志)

二二八

と云ふてあるのか之れである、内地人は俗に金合歡と呼んで居るから、異名の一に入れて置く。

▲檀特(臺灣名)蓮蕉(異名)カンナ、曇華、蘭蕉、白蕉、黃蕉、紅蕉(科名)曇華科

檀特は庭園に栽培せられ高さ四五尺に達する多年生草本で、葉は長卵形にして尖り、平行脈を有し、平骨にして長大である、花は普通艶麗なる紅色の不整齊花を有するのである、此花は元來内地にもある花で、既に和漢三才圖會にも、

高さ三四尺、葉芭蕉に似て小さく、甚だ柔かなり、又薺苳に似て大きく、甚だ硬からず、長さ尺に餘り、濶三四寸、冬枯れ春生

ず、七月莖をて花を抽開く、深赤色形穂最も愛すべし、子を結ぶ、圓くして黒色、甚だ硬し、用ゐて念珠を作る、本と西南外國の草、性最も寒を畏る。

と云つてあるのが是れである臺灣にては之を蓮蕉と云ふのである蓮蕉は連招と音相通するを以て、古來本島人は貴子を連招すとの比喻花として、婚禮には男子の方より必ず其一株づゝを持參する例となり居る有名の花である。

茲に一寸断はつて置かねばならぬのは、美人蕉と蓮蕉とは一寸誤り易すが、美人蕉は花芭蕉で蓮蕉は檀特を指すのであるから混じてはならぬ、古來臺灣人も此の區別を混じて居るものゝあつたことは臺海采風圖の中にも、美人蕉の記事の後に、

蓮蕉、似美人蕉、而花之大數倍、絶如蓮、其花從葉中抽出、無莖、花之杪微綠、似葉云

など、記してあるのでも分るが、此記事たる全く蓮蕉と美人蕉とを顛倒したものである、此點に付て諸羅縣志既に其の誤りを正して居るのみならず、今日は事實之れを證して居るから疑ひはないのである。

尙ほ同書は舶來種に付ては、特に曇花なる一項を設け、左の如く記して居る、

曇花即優鉢羅花、草本、種出西域、有紫白二種、青葉叢生、或一年數花、或數年不花、懸莖包裹、狀若荷蕖、

是に依て見ると今カンナと稱する外國種の檀特の輸入も甚だ古い

ことが分る、普通の檀特の説明としては少しく合はぬ所もあるが、曇花が檀特の一漢名であるといふことは今日學說の一定する所であるから、是又檀特の一種を指したものとするに疑ひないのである、そして種西域に出づとある所より考ふれば、之れは外國種の檀特を指したのであつて、其舶來當時に在ては、本島人も亦之れを區別し、在來種を以て蓮蕉と呼び、舶來種を以て曇花と呼んで居たのである、併し、何百年後の今日に至ては殆ど之れを區別するの必要がないのみならず、何時か混淆して區別すること能はず、遂に今日では何れも蓮蕉と呼んで居るのである、尙ほ稱呼のことは後に詳しくのべる。

檀特は西洋などでは、元は其綠葉を觀賞したものであつたが、花

も萬更捨てたものでないといふ所からして、段々園藝家の苦心改良の末、大輪咲きマダムクロージーなる變種を生じたので、花も有名となつたのである、斯う云ふ風に變種に變種を生ずるので、舶載種までを數へ入れると頗る多い、今殖産局苗圃の苗木定價目録を見るに、舶來種のみにて、安南カンナ、カンナイタリヤ、金覆輪カンナ、カンナアマニング、糸覆輪カンナ、カンナ黄星入、カンナホルバンク、カンナ赤大輪の八種ほどあるのでも分る。

元來が熱帯地植物だけに臺灣に於ては非常に繁殖がよろしいのであるが、非常に肥料を好む性質を持つて居るので、油断して捨て置くに忽ち大輪も小輪となるといふ風で、進化も早ければ退化も早い、で今では紅もあれば黄もある、一重もあれば八重もある、

高いのも、低いのも瘠せたのも太つたのも何でもある、そこで和名に云ふ檀特と洋名に云ふカンナとは別物ではあるまいかなど、云ふトシテカもない疑ひが起らないとも限らないが、決して之れは別物でない、齋田博士の説などに依れば(實用植物圖説)ダンドクカの漢名は曇華及び蘭蕉であると云つて居る、のみならず、園藝文庫の記事に依れば、曇華と書して直にダンドクと訓ましめ、蘭蕉と書してカンナと訓まして居るのみならず、一方に於ては直に蘭蕉は曇華なりと註脚して居る、此等何れの點より見るも、兩者を別物なりといふことを得ないと同時に、漢字に書する場合は、これも檀特でも曇華でも蘭蕉でもよいのである

既に何れも檀特たり曇華たる以上は、内地にもあるから今再び此

處に記する必要もない様なものではあるが、變種も多く、異名も多いので、一寸誤り易い、のみならず本島至る處の庭園を飾つて居る有名の花であるから、特に茲に記するのである。

▲樹蘭(臺灣名)樹蘭(異名)暹蘭(科名)棟科

樹蘭は月橘に似たる五箇の細小葉より成れる單身複葉の半灌木で、花は初秋のころ葉脇より二寸ばかりの絲の如き花梗を垂れ、細微粟の如き黄色の小粒花を無數に點綴するのである。

花に微香あるを以て、土人婦女等好んで之れを簪に用う。樹蘭の名亦此香氣あるを以て名くといふ、花姿樹容亦瀟洒愛すべきものがあるので、觀賞用としても盛に庭園に栽培せらるゝのである、孫元衡の詩に、

清芬殊絶世。不與衆芬同。香溢珠蘭曉。黃先月桂叢。交枝深照席。一夏雨温風。天意特相贈。憐人東大海東
とあるのが之れである

▲玉蘭(臺灣名)玉蘭(異名)木蘭(科名)木蘭科

玉蘭は大形の披針狀全葉の常緑半喬木で、蕾は恰も筆頭狀を爲し、秋季に至り、寸餘の白蠟花を開くのである、其の細長き花瓣は、緩く淡紅色の兩蕊を抱擁する處、隨分雅味がないでもないが、唯長大なる葉に掩はるゝがため、花の外観は頗る擧らないのである、けれども其香氣たる強烈にして、一花尙は能く馥郁として數十歩に及ぶを以て世人好んで庭園に栽培して居る、玉蘭の名蓋し芳香蘭花に似たるを以て名く。

花は土人婦女等好んで之れを簪に用う、けれども其稀れなるため
其寶物を用うることは容易ならぬので、中以下に至ては、多くは
其模造花で間に合せて居るといふ程に愛玩されて居るのである。

▲リエンレンホキ 龍桐(臺灣名)龍船花(異名)ひざり、とうきり、貞桐花、船花、

【科名】馬鞭草科

龍桐は本島至る所、藪の中や木の下などに野生して居る、葉は心
臓形全葉の常緑小灌木である、花は夏より冬にかけて、毎枝頭に梗
葉共に深紅、火の如き多數の繖房花序花を開いて居る、其葉が桐
の葉に似て居るので此名があるのであるが、一寸見ると常山木に
一そつくりである、稀れには白花を着けるものもある、又是れ本島野外
の一趣味である、内地にもあるが、殆ど稀れであるから特に茲に

記して置く。

▲ホラボイラン 虎尾蘭(臺灣名)虎尾蘭(異名)千歳蘭、澎湖島萬年青(科名)

石蒜科

萬年青に似て、挾長厚肉なる並行脈葉を生じ、長さ四五尺に達す
る多年生草本である、其綠色葉上に恰も虎尾の斑紋に似たる鮮明
の飛白あるが故に名く、大葉小葉の二種あり、小葉の分は、秋に
至り、蒼白にして極めて寂寞無趣味なる小圓錐花序花を着けるの
である、が唯其斑紋の奇なるがため、盆栽又は庭園に栽培せられ
る。

▲馬茶花(臺灣名)馬茶花(異名)三友花、番茉莉、番梔子、葉

上花(科名)夾竹桃科

馬茶花は葉に滑澤ある披針形全葉の常緑小灌木で、花は純白多瓣、茉莉に似、合瓣花冠にして瓣端や、縮れて且つ内に屈して居る、總ての點に於て山梔子を小さくした態である、臺灣府志には東甬寮來としてある、花に何等の趣味も香氣もないので、元來花好きの土人婦女子にも全く顧みられないが、花の多いので庭園に栽培せられるのである、孫元衡の詩に、

爭迎春色耐秋寒。聞向人間歲月寬。嫩蕊澹烟籠木筆。細香清露滴金盤。

繡成翠葉爲紋巧。蒂並叢花當友看。日日呼童階下掃。濃陰恰覆曲欄干。

といふのは之である。

▲時計草 (臺灣名) 玉藥花 (異名) 西蕃蓮 (科名) 玉藥科、一に西蕃蓮科

玉藥花は暖地に生ずる纏繞植物で、葉は掌狀に分裂し、冬を経て凋まず、花は扁平にして二寸ばかりあり、白色の細長多瓣にして、内に紫の小針狀形を爲せる無數の副瓣有りて、莖柱を囲み、其先き四方に展開して居る、其狀恰も時計に似るを以て名くのである、秋開花し、赤、紫、樺、白等色々ある、尤も多少の花は殆ど年中咲いて居る、奇花賞するに足る、其花容稍鐵線蓮、轉子蓮 (カサクルマ) に似て居るので、其の一種と爲すものもあるが、此の花は學名をハツシフロラセラリヤと呼び、玉藥花なる特殊の科を爲すものであるから、之れを混同することは出来ぬ。

俳諧歳時記にも朝四つすぎに花開き、暮六時萎む、その次の蕾又明日ひらく、花は一日なれども、相續いて盛久し、花開く時の様子傀儡を操るか如く、回るしへありのすしへあり、上下へかへるしへあり、其様時計の如し享保八年來るとある。

臺灣には紅と紫との二種ありて、紅なるもの花稍大である。

▲生姜の花 (臺灣名) 薑花 (異名) 薑花、はじめのみはな (科名) 薑科

生姜は薑科に屬し、濕地を好む宿根の草本にして、莖の高さ二尺許、根莖の高部は紅色を帯び、葉其他全體の形狀茗荷に類し、根塊に一種の芳香と辛味とを有する食用植物である、秋に至り苞被に包まれたる軟弱の花莖を地中より抽き、五六寸にして開花す。

是又茗荷に似て稍大なるを異なりとするのみである。

▲甘蔗花 (臺灣名) 甘蔗花 (異名) さとうきびの花 (科名) 禾本科

甘蔗の形狀は甘蔗の條に述べたから再び云はぬ、其花は秋より冬にかけて、多數相集まりたる穗狀花、更に相集りて一大穗狀を爲し、莖頭に咲くのである、芒の花の壯大なものと思へは大差はない、唯甘蔗は芒の様に一莖毎に花を着けるのでないから一穗づゝ處々にちらばつて居るのであるが、それが何本となく續いて居るから頗る壯觀である、尤も土匪などを連想して凄い感しの起る場合もある。

▲さつまいもの花 (臺灣名) 番薯花 (異名) からいも、琉球藪、

甘藷、紅薯 (科名) 旋花科

甘藷は蔓生で、光澤ある暗紅色の心臟形葉たることは何人も知處である、其の花は薄紫色にして漏斗状の合瓣花で、其色、其形ともに殆ど晝顔と變らないのである、それが秋冬ごろの野外に出て見ると、何處の甘藷畑にもさびしげに咲いて居るが、頗る風情である。

▲蕉實（臺灣名） 芎蕉（異名） 甘蕉、蕉果、北蕉、粉蕉、牙蕉、
（科名） 芭蕉科

芎蕉は芭蕉中の一種果實の大なるものをいふのである、形狀其他は殆ど普通の芭蕉と異なる所がないから略す。

花は葉叢中より壯大なる花梗を抽出て、伸長するに隨て一瓣づゝ開き、遂に二三尺の長さに達するのである、果實は一瓣内に必ず

一叢十四五個づゝを付け、十數叢に至つて止む、每個の形狀は四稜状をなせる四五寸の棍棒状果にして、初め青く秋に至り熟すれば黄となる、内に柔き果肉あり、之れを食用にするのである、其味芳香甘味、且つ營養分に富むので、世人一般に愛食し、或土人中には主要食料となすものすらある、そこで本島各地は勿論、熱帯地方各地に栽培せらるゝのである、内地には蕉實を六月の部に入れて居る書物もあるが、間違だ。

芭蕉は一般に寒さを恐るゝのと、風に倒れる恐れあるのとで、之れを栽培した畑の四周には、竹を植付けて居る、土人は之れを竹圍と稱して居る。

此外芭蕉には種々あつて、普通の芭蕉は枝葉共に壯大にして、觀

賞用となり、山蕉は小實にして食するに足らざれども、山地に自生して肥料となり、香蕉亦小實にして食するに適せざれども、香氣馥郁なるを以て觀賞用に供せらるゝのである。

内地で芭蕉と云へば、殆ど葉を吟咏するに止まつて居るが、芭葉は既に陳腐たるを免かれないから、今後は可成果實の方面を吟ずる方が面白からうと思ふ。

▲臺灣黒柿 (臺灣名) 毛柿 (異名) カヤマア (蕃語) (科名) 柿樹科

臺東恒春地方に産する山生果實にして柿の一種である、一果の大きさ圓徑約二寸、少しく扁平にして全身に毛あり成熟すれば帶褐赤色となる、味淡甜にして微臭を帶ぶ、花實共に劣等なれども、木材甚だ佳良なりと傳ふ、俗に臺灣黒柿と稱し、洋杖などにして居るの

は之れである。

▲麵包樹 (臺灣名) 麵果樹 (異名) シイカイチユウ バンの木、芝律、亞波羅 (科名) 桑科

麵包樹は宜蘭、臺東の兩地に産する常緑喬木で、高さ三十尺に達するものがある、葉は大形にして缺刻深く、殆ど羽狀形に分裂して大きな八つ手の形をして居る、雄花は多數相集りて棒狀花叢を爲し、雌花は多數相集りて球形を爲して居るのである。

果實は多數の粒狀突起を爲せる多花果で、釋迦果に比すれば二三倍大にして、粒狀突起はやゝ小さく、黄熟するのである、果肉は麵包質で、之を焼いて食するときは稍麵包の味がするので此名があるのである、滋味形狀共に一種の珍果である。

▲釋迦果 (臺灣名) 釋迦果 (異名) 釋迦頭、佛頭果、番梨、番荔枝 (科名) 番荔枝科

釋迦果は本島南部全體に産し、高さ二十餘尺に達する常緑樹で、葉は披針形にして多數の透明なる小點を有し、恰も樺の葉を倍位に引伸したといふ形である。

果實は婆羅蜜と同じく、多數の雌蕊の集合體より生長したもので、拳大の倒卵形を爲して居る、其の多數の蕊痕突起が、如何にも釋迦の頭顱に似て居るので、釋迦頭といふのである、其色までがすゞげ色で佛頭然たるも一奇である、熟するときには自ら裂けて蜂の巢のようになる、味は可なりであるが、松香を帯びて居るので、内地人は餘り好かない、沈光文の詩に。

稱名頗似足誇人。不是中原大谷珍。端爲上林栽未得。只舊海島作安身。

といふは是れである

▲蕃瓜 (臺灣名) 木瓜 (異名) 蕃木瓜、蕃瓜樹、萬壽果、鐵脚樹 (科名) 蕃瓜樹科

蕃瓜は一般熱帶地に産する落葉樹であるが、臺灣にては冬季の間も多少青葉を附着して居る、葉は長さ柄を有し、大形掌狀に分裂して居る、幹は一莖直上して高さ十餘尺に達する半灌木である。此木は雌雄を別にして居る、雌花は白蠟色五瓣にして五稜形の子房を抱き、葉腋より直に樹幹に附着圍繞して咲き、雄花は柔軟なる細長の花梗を垂下し、それに小形の白花穗狀に散點するのであ

る、併し雄木にも雌蕊の痕跡を有するので、老木になると佛子柑
 大の小果を結ぶのがある、恰も瓜の下つた如くに見えて奇である、
 果實は秋冬の間漸次に一個づつ、黄熟するのであるが、其形瓜の如
 く、中には蟹眼状の種子充實す、果肉は甘脆にして柿に彷彿たる
 ものだが、味は甜瓜に似て居るのである、木瓜の名を得たるも之
 れがためである。

此の果實は種々の薬用にも供せられるが、土人は一般に生食用果
 實として食ふのである、其未熟なるものは漬物にもする、之を日
 本的の糠漬にしたるものは殆ど刀豆のその如くに食はれる、

▲真菰の芽 (臺灣名) 茄白筍 (異名) 菰菜、真菰の芽、茭白筍、
 菱筍 (科名) 禾本科

故人の句にも真菰刈る跡は鐵氣の水赤し、などある如く、内地
 にもあるが、真菰は稗に似て太つた水草の一種で、其莖が即ち茄
 白筍である、内地では其葉を牛馬の飼養料にするが、藤を織る丈
 けであるから、甚だ用途が狭いのだが、臺灣では之れを食料に供
 するので、用途甚だ廣く隨て池沼泥溝等、苟くも沮洳たる水溜り
 あれば何處にでも植てあるのである。

茄白筍は臺灣土語であるが、支那官話では菱筍と云て居る、蘇頌
 には菰菜と書いてある、移住内地人は單に真菰と云つて居るが、
 養るとか食るとか云ふ語と連用するならば之でも通じないこと
 はない、尙ほ正しく云ふには「真菰の芽」「真菰の心」「真菰の子」
 などと云ふのが一層明瞭でよからう。

蘇頌にも菰は春芽を生じ、夏成長するとある如く、無論臺灣でも春芽を生じ、夏成長して莖を抜き穂を生ずべき筈のものであるが、臺灣で作るのは、莖は生ずるが、長く抽出ることはない、夏生じて五六寸に至ると、それが不思議にも上への成長を止めて、其のまゝ秋に至る、それが即ち茄白筍と稱して食料に供せられるのである。

川上農學士の談に依ると、此菰の字の古義は一種のキノコと云ふ意味に用ゐられたのであつたが、今の眞菰に其のキノコが多く生ずるので、遂に其名稱となつたものらしい、即ち眞菰の莖が五六寸になつたころ、菰と稱する一種の黴菌たる黒穂菌が之れに寄生するので、其上への成長を止め、局部のみ隆起肥大し、遂に筍状

を爲して秋に至るのであつて、之れを、食するは恰も、他の食用菌類を食するのと同ー理で、誠に世界に於ける珍品ぢやといふことである、して見ると俗に唐黍に生ずるおばけと稱する黒穂菌と同一性質のものである。

そこで此の黒穂菌の生ずるのは流通する水の中よりは、溜つて居る水の方がよく發生するので、臺灣人は可成水の流れない處を選んで植ゑる、又其苗にも、成るべく一度菌の發生した古株を分けて種に用ゐ、専ら新株にも其の發生を計り、偶々無病にして莖の伸るものがあると、却つてそれは切り去つて仕舞ふので、臺灣では穂は殆ど見られないのである。

茄白筍は煮食するのであるが、其味は、甜味があつて、軟かい筍

の味がする、肉質は純白であるが、中には少しく黒い斑点のあるのがある。それは菌の稍々生熟したので食用として何等の差支ない、一層成熟すると眞黒になる、斯うなると味が無いから食用にならぬ。

内地にも多少はあるが、殆ど食用にすることを聞かない、唯其の黒く成熟したものを、眞菰墨と稱し、顔料に販賣して居るだけのことである。

▲楓(臺灣名)楓樹フナキユウ(異名)かえで(科名)金縷梅科

楓は臺灣原産の落葉樹で其葉は略もみぢの如くであるが、蝦蟇の手に似たる三裂葉である、故にかえでとも云ふのである、其葉は秋季紅變して落葉するのである、彼の停車坐愛楓林晚。紅葉紅於

二月花。と詠まれたのは此楓である、日本にもみぢと云へる槭のことではない、樹は多少觀賞用にもするが、多くは建築用又は薪炭用にするのである、殊に天蠶の飼養料に適當なるべしとて、本島に於ては、目下大に望みを屬せられて居る木である。

▲月桃實(臺灣名)月桃子グイトオチ(異名)虎子子(科名)藜荷科

月桃の實は明瞭なる堅筋を有する拇指大の毬果數十個を簇生し、穗狀を爲せる頭上果實である、初めは青くして頗堅いが、九月ごろより追々色付き、十月に至りて堅牢なる朱玉色となり、累々として珊瑚珠を連ねたらんが如くに成り下つて居る所は、又一種の趣味を帯びて居る、そして十月末ごろ自ら破裂して種子を散布して仕舞ふのである。

▲椰子(臺灣名)椰子(種類) キャベツ椰子、サゴ椰子、棗椰子
 (科名)棕櫚科

椰子は本島南部の小部分及び紅頭嶼に産し、高さ三十尺餘に達する常緑樹で、葉は大形の羽狀複葉で、幹頂に叢生するのである、夏に至り葉腋より長き花梗を抽き、之れに附着して順次に數十個の象牙細工的白蠟花を付けるのである、艶麗ならずと雖も、頗る高尚な花である。

果實はやゝ長形にして三稜狀を呈し、長八九寸徑四五寸あり、纖維より組織せる強韌なる外皮を有し、更に果皮の内に堅牢なる内圍層を有す、其内に乳様の液があるが、之れが土人の飲料に供せられるのである、東坡の詩に美酒生林不待儀といふのは之れである。

る、兎に角木の王と稱せられ、熱帯地の重要植物の一となつて居るのである、熱帯地に遊べる詩人は是非一句なかるべからざる木である。

椰子には尙ほ棗椰子、サゴ椰子、キャベツ椰子など色々あるが、本島には本椰子及び棗椰子の外はないのである、尙ほ一種蘇鐵椰子と稱するものがある、之れは全島至る處にあるが、之れは本名を枕榔と稱し、土人は全く椰子と區別して居るから、別に掲ぐ。

▲檳榔子(臺灣名)檳榔子(科名)棕櫚科

詳細は檳榔樹の花の部に述べてあるが、其の實が即ち檳榔子である、南部臺灣人は男子も女子も、恰も内地人が烟草を吸ふが如く、談話するにも歩行するにも、常に之を嚼むで居るのである、之れ

を嚼むには、先づ檳榔子の未熟青色のを採り、之れを二三片に割り、檳榔灰を付け、荖藤の葉に包み、之れを口に入れて二三十分間も嚼み居り、仕舞に唾液と共に吐き棄つるのである、之れを吐き棄てた所は眞赤になる、丁度吐血したとしか見えない。之れを嚼むときは一種の辣味口中を刺激し、且つ少し酩酊する傾きがある、其の滋味のため齒は眞黒になつて、丸で鐵漿を付けた様に見える。

元來臺灣人が檳榔子を嚼むのは、内地人が烟草を喫するのと同じく、全く翫味用に供するに過ぎないのであるが、彼等の間には其の習用の久しき結果、之れを用うれば瘴氣を拂ふと云ひ、又婚禮其他の贈物とし、或は賓客の接待物として盛に用ゐられて居る。

である、孫元衡の詩に

竹節櫻根自一叢、連林椰子判雌雄、
醉醒饑飽渾無賴、未必於人
有四功、扶留藤脆能久、古賁灰勻色更嬌、
人到稱翁林更食、衰
顏無處著紅潮、

といふのがあり、又張鷟の詩に、

丹頰無端生酒暈、朱唇那復吐脂香、
饑餐飽嚼日百顆、傾盡蠻洲
金錯囊、

といふのがあり、共に醉氣を催すことを證明して居る。

▲木藍（臺灣名）大菁（異名）蕃菁、こまつなぎ、つはきあゐ、
金剛草、印度藍（科名）豈科

木藍は、廣く本島の壤砂區域一般に栽培せらるゝ製藍用植物にし

て、其狀萩に似て稍小なる越年生小灌木ある、夏に至り赤黄色にして萩に似たる小花を着け、結實して莢となる、土人は三月に播種し、九月に至りて第一回刈取を爲し、之れを一番藍といひ、翌年六月に至りて第二回目刈取を爲し、之れを二番藍と爲し、其年九月に至りて第三回目刈取を爲し、之れを三番藍と爲し、之れにて一期を終る、即ち二年に渡り、都合三度の刈取を爲して一期とするのである、そして土人は何時も開花せんとする處を刈取つて例の泥土藍を作てあるから、吾人は殆ど其花を見ることは稀れなのである。

▲なんさんまめ《臺灣名》土豆《異名》落花生《科名》荳科

土豆は地上に蔓延する一年生草で、葉は滑澤なる四個の小葉より

成る偶數羽狀複葉である、花は黄色の蛾形花冠を有するのであるが、其の子房が花後地中に入りて實を結ぶも奇である、種子より油を搾り、又食用にもする、本島の一大産物たるを以て一季題とせざるを得ない、收穫の季に因み秋とすべきである。

▲凸柑《臺灣名》凸柑《異名》柑仔、蜜柑、並柑《科名》芸香科

凸柑は本島蜜柑中主要なるもの、一にして、本島蜜柑中最も甘味多漿にして、且つ最も偉なるを以て世人に賞美せらるゝ蜜柑である、其の新埔より産するを以て俗に新埔蜜柑とも呼ぶのである、其詳細は芳賀農學士の講演中に明瞭なるを以て、左に抄録して置く。

樹性强健、樹姿半開扇狀を呈し、枝條細小にして叢生するの性

あり、葉は細小にして、尖端鋭ならず、葉肉薄くして色淡く、枝上に密生す、果形に二稱あり、一は果梗附著部の凸生せるものにして、他は扁圓形をなせるものなり、兩者の品質を比較對照するに、前者は凸柑の名に一致せりと雖も、風味の點に到りては後者に及ばず、何れも果皮は濃橙黄色を呈し、油胞細密にして滑澤あり、厚さ一分位あり、剝皮極めて容易なり、果底、陥入して數條の放射線を存じ、果頂も亦然り、一顆の重量四十匁を普通とす、瓢囊十一前後にして、各々分離し易し、沙瓢は粗大にして鮮赤黄色を呈し、多漿甘味に富み、恰も温州蜜柑の如き風味を有す、十一月下旬成熟す、一顆中數箇の核子を藏す、果心に大なる空隙を存じ、甚だしきは徑一寸に及ぶものあり、

之れ本果の一缺點なり。

本柑栽培の起源は七八十年乃至百年前にあり、其最も古きは新竹廳新埔して、次に彰化の員林に及べり、何れも其栽子は凡て對岸清國より輸入せるものとす。

▲水柑（臺灣名）雪仔^{サツアア}（異名）蜜柑、雪柑、柑仔（科名）芸香科
水柑は酸味を帶ぶると、多漿なるを以て有名である、雪柑、水柑の名、皆之れがために出來たのである、果皮難剝にして、刀を以て削剝するが故俗に庖丁蜜柑とも呼ぶ。

雪柑も亦凸柑と共に、本島在來柑橘中主要なるもの、一にして、樹姿温州蜜柑に酷似し、枝條大にして濃緑を呈し、垂下するの性あり、葉は深緑にして濶大なり、果實は圓形或は稍長圓形に

して、外皮淡橙黄色を呈し、油胞大にして密、表面極めて平滑なり、果皮薄くして、剝皮困難なり、内部能く充實し、瓢囊十乃至十一あり、各々分離し難し、核子は一顆中に二三箇を有すれども、亦無核なるもの尠からず、沙瓢淡黄細密にして、多漿甘味に富み、味頗る「ワシントンネーグル」に似たり、此種には「ネーグルオレンヂ」の如く、臍を存するものあり、十二月上旬より成熟を始む。

本柑栽培の起源は凸柑と同一にして而して其最も古きは臺北廳下和尚州とす（芳賀技師講演）

▲桶柑（臺灣名）樟仔（異名）年柑、蜜柑、柑仔（科名）芸香科
桶柑は普通の内地蜜柑に類し、甘味水氣、共少きを以て餘り賞す

べきものではないが、一番遅く迄あるので、他の蜜柑の無いころになつて大に賞用せらるゝのである。

桶柑は樹姿頗る凸柑に類似すれども、其葉長大にして粗著し先端尖鋭ならざるの差あり、本種に二別あり一は普通種にして十二月の候に成熟し他は高塔桶柑にして、翌春三月頃まで樹上にあるを以て、將來有望の品種たり、果實は中等大にして圓形、外皮橙黄色にして稍々粗なり、内部充實し、剝皮容易にして、生食及製果に好適す、瓢囊は其數九乃至十箇を有し、稍々離れ難し、沙瓢は鮮黄色を呈し、多漿甘味にして頗る口に適す、本柑は臺北廳下和尚州を以て最古の地とす（芳賀技師講演）

▲水芋（臺灣名）水芋（異名）芋頭、番芋、土芋、土芋、蹲踞、

圓芋、檳榔芋、淡水芋、糯米芋、(科名)天南星科

芋類は往古より食用植物として廣く熱帯及び暖温帯地方に栽培せらるゝ一植物であるが、之には數多の種類がある、而して此の水芋は、外觀殆んど青芋サトイモと異なる點を見ぬが、只吾人の要求する部分即ち根莖はそれよりも大にして長く、楕圓形をして居て、其の内組織も非常に粗である、そして常に濕潤なる水中に生育する事は、全く普通の芋と異なる點である。

之を栽培するには、前年生じたる小芋を、蒔置き二三月頃、水田又は灌水に便なる畑に畦を作りて移植し置き、八九月の交に至れば收穫することが出来る、川上氏の農事報には「臺灣にて芋類は、一般に芋頭又番芋の名にて呼稱せられ、土芝又土芋、蹄謁又圓芋、

檳榔芋又番芋、淡水芋又糯米芋等あることはヘンリー氏臺灣植物目録に記載あり」とのことである。

▲樹豆(臺灣名)米豆ビイダウ(異名)柳豆、木豆(科名)荳科

樹豆は本島南部に栽培する普通作物の一種で、漢名を柳荳、米荳、若樹荳と云ひ、直立せる小灌木にして普通五六尺に達し、基幹帯綠色にして縦に細溝あり、葉は莖に互生せる三出の複葉にして托葉あり、各小葉も亦微小なる托葉を有し、長楕圓形若くは披針形をなし、表裏共に微毛を密生し、柔軟にして、手に觸るれば天鵝絨に接するの感あり、裏面淡綠にして比較的粗なるを常とす、黄色にして蝶形花を枝梢に開き、落花して莢を生長するのである、莢には多少の毛を密布し、長さ一寸、大豆に類似し、中に四五粒の

種子を含む、初め青色なれども熟するに従ひ褐色となり、後ち縫線より裂けて種子を飛散す、性質温暖なる氣候を好み本島にても中部以南に多く、北部に之を見ない。

豇は鹽を加へて煮るか、若くは豚肉の類と共に煮食するのであつて、前者は嘉義地方山地の生蕃に多く行はれ、後者は南部一般農家に見る處である、總べて樹豇は粒の儘煮食するよりは、之れを粉とし、黄粉の代用となし、天麩羅其他に用ゐるものが多い、特に此の粉を以て細線なる素麵の一種樹豇麵を製造す、其の味良好にして本島人の嗜好食物にして米粉の到底及ばざる所なりと云ふ、製品は色澤ある淡黄色若くは飴色を帯びて居るので一見して分る各地の市場に於て盛に販賣して居る。

因に、四月下旬乃至五月上旬播種し、十二月開花し一月乃至二月下旬に至り收穫す可し、樹豇に二種あり白樹豇、花蝶樹豇是れにして後者は熟期をそきも品質良好なり。(農事試験所臺灣重要農作物調査書)

▲**蔕豆**(臺灣名) **菜豆**^{ツライカ}(科名) **藤豆**、**せんごくまめ**、**天竺豆**(科名) 科科

蔕豆は蔓生の荳科植物にして、葉は一莖三葉を付け、蔓赤く、花は紫の蝶形花にして穂の如く蒴りて開く稀れには白きものもある、其紫なるものは豆の色黒褐にして、白きものは豆白し、多くは秋季未熟なるものを莢と共に煮て食料とするのである、此の豆は内地にもあるが、本島には殊に多く、畑にも作るが、能く溝や池の

土手に放種し、水の上に棚を作つて匍匐はしてゐる。

▲ワラス豆(異名)臺東豆、臺東菜豆(科名)荳科

ワラス豆の如何なるものなるやは、世人の多く知らざる所なれども、田代安定氏の臺東殖民地豫察報文に頗る珍品なる由記載してあるから、左に其全文を記して置く。

ワラスは阿眉蕃語にして、日本語を以て譯し得べからざる珍異の豆科蔬菜なり、阿眉蕃の培作品にして來歴は彼等も知らずといふ、至て稀少の品にして、生蕃人も之れを珍菜として愛植す、該豆は沿岸地方、貓公社及び北頭溪社の阿眉蕃能く播種し、奇來南勢蕃も亦之れを植う、又支那人族にては、大港口庄通事蕭友隆及び花蓮港附近にも栽植するを見る、之れは菜豆狀の藤蔓植

物にして、葉は三出して品字形を爲し、柔軟質にして、菜豆葉の二分の一より稍細小なり、青紫色の蛾形美大花を着け、莢は箭羽狀の稜角を爲し、長三四寸、淡綠色にして一種の奇觀を有す、菜豆インゲン若くはサヤ豌豆の如く、其嫩莢を食用に供するものにして、味ひ淡美、柔脆にして多食するも厭かず、眞に最佳の珍菜といふべし、倘し西洋料理等の菜料に供しなば、必然十分の價值を添ふべし、是れ便ち特り臺灣のみならず、我が東京其他の各地にも廣く播種を圖るべきものなり、今次臺東巡回中國藝植物の逸品として特筆すべきものは實に此のワラス豆なり、今假りに臺東豆又は臺東菜豆と名け置きて覽者の撰採に任す。

▲熱柿(臺灣名)紅柿フシキ

臺灣の红柿は内地の熟柿の如く、成熟して自然に紅變するのとは全く違つて、酷暑時分の若い中でも、煉油を差して紅熟させるのだから、内地の熟柿とは自ら異なるのであるが、其の紅變して玲瓏透徹する所、内地のそれと同一であるから、暫らく熟柿の名を用ゆ、詳細は澁抜の條を参照せよ。

▲澁抜柿 (臺灣名) 青柿 アエンキイ

内地人向に澁柿の澁を抜いたものである、土人用の红柿に比すれば其色稍青さを以て、之れに對して青柿と呼ぶのである、詳細は柿の澁抜の條を参照せよ。

▲伏稻 (臺灣名) 暹稻仔 シヤウイコウアツ

臺灣の稻は落ち易いので、風が大禁物である、其れ故或る程度迄

熟すと、植ゑたまゝ根ぎはから折りまげ、順序よく田の上に伏せて居る、其幅は大抵三尺位づゝを一條としてある、南部臺灣の海岸附近に於て殊に多く之を見る、一寸變つた慣習である、元來内地では稻が田に平になつて生へて居る所や、懸稻カケイコを指して何れも稻莖といふ名を付ける居るが、此等はあまり形容に失する嫌があるが、之れに比すると臺灣の稻を伏さした所は一層稻莖といふ名に適切であるから、舊季題に當て候めて之を稻莖といふてもよし、又新季題として伏稻といふたならば更に適切で面白い。

冬之部

人事

▲水官祭(臺灣名)三界公生^{サンカイコンセイ}

水官菩薩は俗に之れを三界公といひ、夏の禹を祭りたるものである、十月十五日は即ち下元にして、水官公は此日に誕生したのであるし、且つ道經には此日水官下降して人々の罪福を校すと曰ふのであるので、各戸之を祭るのである、又堡庄にては三界公會なるものを組織し、平常齋金して、此日の祭費に充つるもありて、中々盛に芝居などをやるのである。

▲補冬(臺灣名)補冬^{ホオタシ}

本島には、古來、補冬と稱し、毎年立冬の日、羊肉、姜、棗、人参、肉桂等を雜炊して食する慣習がある、其趣旨とする所は、元來此等の物品は、其性温熱を生すべきものであるから、之れを食して、冬季の温暖を増し、元氣を補はんとするにあるのである、今や此俗相習ふて風を爲し、殆ど全島に行はるのである、唯赤貧者にして羊肉を購ふの餘裕に乏しきものは米膏を炊きで之れに代用するのである、米膏は米粉に砂糖を入れて飯の如くに炊きたるもので、餅とは全く違ふ、兎に角羊肉にせよ、米膏にせよ、此日に其何れかを食せざれば、後來迅速に衰朽するを免かれないからといふので、人々必ず之れを食することにして居るのである、内

地の薬喰と同意味のものである。

▲冬節丸(臺灣名)冬節員

冬至のことを一に長至節ともいふ、此口米の粉を以て團子を作り、之れを冬節丸と唱ひ、家神及び祖先の位牌に各三碗づゝ供へ、献灯焼香して祭るのである。

▲黒頭巾(臺灣名)烏巾

烏巾は閩族婦人用頭布の一種である、色は文字その示すが如く、必ず黒に限つて居る、長も七尺に限つて居るから、男子用の頭布と同一であるが、物は縹子、緞子、天鷲絨など色々ある、そして丁度額上に出る所に牡丹や蝶などの刺繍がしてある、之れを用るには蔽巾とは全く其方法を異にして、細く四つに折つ

たのを額からかけて後に廻はし、後鉢巻と云つた體裁に後で結び、其の残つた分はだらりと背後に下げて置く、之れは色も黒だし、長さも七尺といふので、此點から見ると殆ど頭布又は蔽巾と異なる所はないのである、が何故か、臺灣人は決して之れを頭布若くは蔽巾とは云はない、そこで是又別に冬の二季題とするの外はない。

▲黒手巾(臺灣名)帕巾(異名)蔽巾

帕巾は婦人用頭布の一種である、尤も閩族(福州)婦人にはあまり使用されないが、粵族(廣東)婦人間には一般に愛用されて居るのである、其効用から云ふと、男子の頭布は防寒一方であるが、帕巾の方は防寒に用ゆるか寧ろ埃除けである、是即ち勞働に關係せざる閩族婦人に顧みられずして専ら勞働に従事する粵族婦人にのみ

愛用せらるゝ所以である。

帕巾はやはり七尺ほどの細長い黒布である故に通常は廣げて頭にかけ、兩頬をも覆ふてだらりと下にさげて居るのであるが、若し勞働に従事するときには、其垂れた部分を頸の下で結ぶか、又は四つに折つて頭にのせ、後の二角を鬚の下で結で居る、一寸内地の藝人被りと云つた鹽梅だ。

在臺の粵族婦人は何れも黒木綿を用ゐて居るのであるが、廣東地方に行て見ると、近來は日本綿布が流行するので、紀州ネルの縞物を切りに愛用して居る。

帕巾も頭巾の一種には相違ないが、臺灣人は之れを以て頭布の一種と見做さず、帕巾は帕巾、頭布は頭布、頭巾は頭巾と區別して

居る慣例であるから、此處にもやはり別個の一章題とするの必要がある、そして帕巾は一に蔽巾とも云ふのである、勿論音通から來たのであるが、どちらにしても意味は通じる。

▲召君眉(臺灣名)召君眉(異名)海眉

召君眉は閩族婦人が烏巾の代りに使用するものであるが、其始め召君が用ゐる始めたから此名があると云つて居る、又上海からの輸入に係るので上海眉とも云ふ、形は鈍豆を二本、尻の方で接合せたといふ様なもので、其兩端に紐が付いて居る、其れを額に當て後に廻はして其の紐で結ぶのである。

地質は羅紗、縐子、天鷲絨など色々ある、色も烏巾と差つて青黄赤黒等、白を除くの外何でもある、何れも金絲か何かで、蝙蝠と

か牡丹に蝶とか云ふ様な花鳥の刺がしてある、時としてはあつさりど珠玉を一顆點綴したばかりのなごもある、つまり之れは子供でも老人でも用ゐるのであるから、模様や飾りは自然それに相應する様に色々出来て居るのである、代價は大抵一圓前後、冬季の季物たることは云ふまでもない。

▲耳覆(臺灣名)嵌耳カミミ

嵌耳は召君眉を兼ねた耳覆である、それ故其形は召君眉の兩端が、耳を覆ふに足る様に、其端に至て急に廣くなつて居るのである、全體の上から見ると一寸亞鈴を平らたくした様なものである、其の召君眉と異なる所は唯之れのみ、其他は地質と云ひ、色合と云ひ、飾模様から用方に至るまで、全く召君眉と同一なので、召君

眉の記事を参照すれば之れも自ら明かになるのであるから、其の詳細は同記事に譲て此處には暫らく缺如して置く、昔しは男子用嵌耳もあつたのであるが、今日では殆ど用ゆるものはないのであるから、一口に嵌耳と云へば先づ婦人のものとして置いて差支なからう。

▲火籠(臺灣名)火籠ホエロン

臺灣人は殆ど火鉢を用ゐない、まして安火や炬燵といふ様なものは全く知らない、そこで冬になると、暖を取るために、鐵鉢の少し丈けの高い位の土焼火鉢を、粗末な蔓付きの籠に入れそれに火を入れて、懷から手を入れて、それを股に提げて居る、時としては銅製の上等品を提げて居るものもある、總じて之れを火籠といふて

居る。

二七〇

火籠抱いて爪の長さを爐に籠る 北 星

▲冬の蚊帳(臺灣名)冬蚊罩トウモシカシ

臺灣は熱帯だけに冬でも春でも蚊が居る、殊にマラリヤの混虫傳染は一種の蚊の媒介に依るものと決定せられて以來、一疋でも蚊の居る間は蚊帳を釣るの必要がある、そこで夏秋は勿論冬でも春でも蚊帳を釣るのであるから是又冬の一題材とせざるを得ない。

▲綠肥蒔(臺灣名)播綠肥ホクリョウ

綠肥用植物には豆豌豆など種々あるが、北部臺灣にては、稀れには豆を蒔くも大底蘿蔔を用ゆる、蘿蔔は十字科植物で、内地にては食用蔬菜として秋蒔くのであるが、臺灣にては田の綠肥用とする

のだから、冬でなければ蒔けぬ、其蒔方は第二期稻を刈取ると、其跡を犁き起し、荒ごなしをしてすぐ蘿蔔種を蒔いて置くのである。

▲苗代園(臺灣名)草園サウヰ(異名)防風牆、遮風牆

舊曆十二月ころ、田圃に出て見ると、處々の田の畔に二三間もあらうと思ふほどの高さに作られた牆様のものがある、満目蕭條として一物の目を遮るものなき冬田の中に、斯かる雄壯の作物を見るのは、頗る壯快の感じがする、是れ即ち苗代の風除けであつて其日南には何れも苗代が作られてあるのである。

亞熱帯とも云はれて居るほどの暖い此の臺灣で、苗代の風除けは一寸無駄な様な疑ひも起らないではないが、事實決してそんなもの

でない、抑々臺灣の稻作なるものは、人も知れるが如く、至る所
 二季作であるから其苗代は氣候の最も寒冷なる冬の半ばから作ら
 ねばならぬ、そこで之れが防寒の方法は農民の最も苦心する所で
 ある、之れがため苗代の風除なるものは、臺地至る所にあるので
 ある、亦以て臺地の一景物たるを失はない。

之れを作るには藁で作つたのもある、甘蔗の葉で作つたのもある、
 又前以て篠や竹などを植ゑ置いて、それに薄く藁を著せて作つた
 のもある、そして仆れない様に何れも繩で後へ引張つてある。

其名は臺灣人間にも一定して居らぬらしい或は防風塙、遮風塙な
 ど、云つて居るが、何れも其効用からして臨時に其物を指示する
 までのもので、未だ一定した固有名詞となつて居るのではないら

しい、そこで内地には「茶の木園ふ」など云ふ詞もあるから之れ
 に倣つて和名を「苗代園ふ」としたらよからう、單に「風除け」と云
 ふも差支はない。

▲甘蔗植(臺灣名)種甘蔗ナエンカムチヤナ

甘蔗を栽培するには、十一月乃至翌年三月迄に、良く成熟せる甘
 蔗の莖頂、發芽力旺盛なる部分を、葉鞘と共に二三節を附し、七八
 寸乃至一尺三四寸の長さに切斷して種苗とする、此の種苗は十數
 本宛一束とし、二晝夜乃至四晝夜間、水中に浸積し、莖中の糖水
 を浸出せしめて蟲害を豫防すると同時に、發芽の促進を計る、愈
 挿植するに當つては、種苗の下部二三節の葉鞘を剥ぎ去り、以て
 其の發芽を容易ならしめる、扱て移植期になるも、尙ほ前作物(甘

蔗、豆類」の收穫を終らざる畑地では、其の畦間若くは畦上に植ゑ、普通收穫跡地では、之を犁耕し、刈耙及手耙を以て深耕し、畦幅三尺五寸乃至四尺五寸株間一尺五寸乃至二尺の距離に、堀仔と稱する甘蔗植付器を以て、稍斜に深さ一尺の植孔を穿ち、苗の先端一寸程を残して押移し、周圍を踏み固め、後全部を覆土するのである、又一法、平植なるものがある、深さ二寸程の溝を設けて芽を兩側に向けて水平に置き、一寸五分計の深さに覆土するのである。

又、株出法と云うて、昨年のもの、刈根から發芽せしめる方法もある、之は苗を探る手数はないが、自然收量は少ない、移植したものは其後十日乃至二十日で發芽するのである。

▲甘蔗刈(臺灣名)刈甘蔗コウカンチヤヤ

甘蔗は刈つて置けば糖分が減るから、刈れば畑から直に糖廓に搬入するのである、そして砂糖の製造は毎年一月から五月迄の慣習であるから、其刈入れは冬春である、隨て俳句の季題などには冬となる。

刈るに何等の奇もないが、甘蔗は本島三大農産の一で、全島至る處行はるのであるから是非一季題とせざるを得ない。

刈れば葉を去り心を切り、莖は經一尺ばかりに束ね、牛車にて糖廓又は停車場に搬入するのである、切去つた葉は、焼いて灰を肥料にするのもあるが、多くは水牛の飼養料又は屋根草杯カサにする。

▲神送(臺灣名)送神サシム

○冬

人事

▲甘蔗刈

▲神送

臺灣にては十二月二十四日朝、諸神に牲醴香燭を供へ、銀紙を焚き、爆竹を放ち、神馬を焚いて神送りを爲すのである、俗説に諸神、玉皇上帝に元旦の朝賀を爲すがため此朝を以て旅立すとあるがため、乃ち之れを送るのである。

送神に就て特別の儀式とする所は、即ち神馬を焚くの一事であるが、此神馬といふのは、神が馬に乗つて居る所を畫いてある繪紙であつて之れを刈金、壽金などいふ金銀紙と共に、門口に於て之れを焚やし、空中に抛ちて神の天上するのを送るといふのである其馬にも亦神馬と駕馬といふ區別があつて、神馬の方は赤摺で、駕馬の方は黒摺なのである、そして其の赤の方は神様御自身で、黒の方は神の臣下即ち其のお供の衆なのださうだ、それであるか

ら之れを送るには必ず此の二種を一緒に焚すことになつて居る。

送神を行ふ時刻は何時と限つたことはないが、早くないと神様が好い場所を取損ふからといふので大抵の家では朝の内に行ふ例になつて居る、内地の神の旅の類である。

二十四日前二三日になると、貧乏人の子供が籃をさげて『神馬、駕馬、飯春花』と黄色い聲で賣て歩行くから、大抵はそれを買ふのである、價は大抵一錢に十枚位のものである。

籠神もそこへに立たれ玉ひけん

▲玉皇祭(臺灣名)皇帝生オンダイタイ

俗傳に、十二月二十五日、玉皇上帝諸神を隨へ、諸天を巡視し、來年の禍福を定むるといふので、此日を以て諸民は、威く齋戒し、

香を焼きて之れを祭り、以て福祉を迎ふるのである。玉帝祭は其誕生日にもするから、之れを混じてはならぬ、尙ほ生とは誕生日の祭りを云ふのであるが、土人は其慣用の久しき何時でも祭のことは生といふのである。

▲店仕舞(臺灣名)尾牙ビゲイ

各商店に於ては十二月十六日を以て歳終の牙祭を行ふ、之れを尾牙といふ、此日には平常取引ある店舗の主人又は顧客などを招きて盛宴を張るの例である。

▲春聯(臺灣名)賣春聯ホエツリン

春聯の部を参照せよ。

▲除夜(臺灣名)辭年シイニイ(異名)圍爐飲酒

除夜には各戸相當の供物を供へ、献灯焼香して家神及び祖先を祭る、之を辭年といふ、祭畢て一家の老幼序を以て卓を圍み、卓下火鉢を置きて環坐し、各吉語を道ふて一同暢飲す、之を名けて圍爐飲酒といふ。

▲爆竹(臺灣名)炮仔ハツアツ(異名)紙砲、鞭砲

炮仔は故事群芳に、西方山中有人。長丈餘。人見即病。名曰山臊。每以竹著火中。聲響即驚遁。後人束紙爲之。納以竹筒。是其遺俗。とあるが如く、炮仔即ち爆竹なるものは其昔しは眞實竹其のものを火中に投して爆發せしめたのであるが、後世に至り紙にて筒を作り、爆發薬を用ゐて爆發せしめ、以て音響を發する所の一種簡單の爆竹代用物を作つたのである、そこで文字に書くには今

尙は多く爆竹と書いて居るが、普通には之れを炮仔と呼で居る、唯其大小を區別する必要あるに當ては、其大なるものを大砲といひ、小なるものを炮仔と云つて居る、又別に紙砲又は鞭砲とも云つて居る、即ち前者は其筒の紙製なるに取り後者は長鞭の如き音響を發するに取つた名稱である。

爆竹は何のために用ゆるのかといふことは其歴史を見るのが一番早く解る、即ち「五雜俎」に、儼は以て疫を驅るなり、古人最も之を重す、漢より唐に至りて、禁宮中皆之れを行ふ、護童辰子千餘人に至る、王建が詩に曰く、金吾除夜進儼名。書袴朱衣四隊行。と是れなり、今即ち民間此戯なし但書鐘馗と燃爆竹とのみ、云々とある如く爆竹は追儼と共に全く除夜疫鬼を驅るがために用ゐら

れたものであつたが、今は追儼は行はれず、單に爆竹のみが追儼の代用として用ゐられて居るのである。

茲に一寸疑ひの起るのは、日本の舊俗に依ると、追儼は例の節分に豆を蒔て「福は内鬼は外」とやるのであるから、追儼が何も除夜に限つたことはあるまいとの疑ひであるが、併しそれは近來のこと、日本に在つても、昔しは支那と同じく除夜若くは其前夜であつて、節分にしたものでないといふとは、「江次第裏書」には儼を行ふは晦日に前だつこと二日とあり、「公事根原」には晦日、とあるにても推し得らるゝのである、殊に臺灣の如く、今尙は現に除夜に行つて居るものに就ては、事實の前には反證を許さず、何等の疑を容るべき餘地はない。

彼の春聯の對句で見ても「爆竹聲中一歲除。春風送暖入屠蘇。千門萬家曠々日。總把新桃換舊符」とか「爆竹一聲除舊桃符萬戶更新」とか云ふ様な句が幾等もあるのを見ても、臺灣人の除夜に盛に爆竹をやる事が推せられるのであるが、實際土人町の除夜の状況を見れば更らに其盛なるに驚かざるを得ない程である、勿論廣い意味に於ては惡鬼を追ひ、邪氣を拂ふがためにするのであるから他の場合例へば祭禮若くは神佛參詣等の場合にも用ゐられるは、言ふまでもないことであるが、一番盛に用ゐるのは即ち除夜であるから、之れを歲末の一季物とするのである。

尙ほ一言し置くべきことがある、即ち例の馬琴の「歲時記」には爆竹を左義長の一種として春の部に掲げて居るが、左義長の一種なる爆竹はとんどと訓むので茲に云ふ爆竹とは全く其性質を異にして居るのであるから斷わつて置く。

動物

▲冬の蚊(臺灣名) 冬蚊
臺灣は熱帶地なるがため、冬も蚊が居るから是又當季の一題材となる。

▲鱧(臺灣名) 沙魚(種屬) 軟骨魚にして諸科を含む
沙魚には種類が多いが、何れも海底沙泥質の處に於て、常に小動物を餌食として遊廻して居るのである、それが通例十一月(陽)頃より初め春一杯近海に遊びに来るから、此季節に於て、延縄刺網

及び手釣道具を以て捕獲するのである、餘り上等の魚ではないが此魚からは、精翅土人の所謂魚刺なる貴重食品を得ることが出来るのである。

▲ぐれ(臺灣名)烏毛魚(種屬)かさごたい科

烏毛魚は形體扁平にして、眞黒である、常に沿岸の藻の間に棲んで居るのを刺網で捕るのである、年中捕れるが冬のが一番美味なのである、價甚だ廉ならず。

▲西刀魚(臺灣名)西刀魚(種屬)あじ科

西刀魚は體形扁平にして、且つ長く、やゝ「さんま」に似て、非常に脂肪に富んだ魚である、冬春の候海岸に來り他の魚と共に遊んで居る處を他の魚と共に網で捕るのである、甚だ劣等の魚である

が鹽をして販賣するのである。

▲鱸(臺灣名)烏魚(科名)ぼら科

烏魚は硬骨魚刺鱸類の「ぼら科」に屬する鹹水産魚族にして、冬季に於て産卵のため、雌雄相伴ふて岸邊に寄せて來る、それを期として捕るのである、漁獲の方法は捲網、敷網、投網の諸具を用ゐて獲るのである、其初期に來るものは、雌七分雄三分の割合であるが漸次雄の數を増加し、其の終期のころには、全く初期に反して、雌三雄七の割合になるといふことである、多くは鹽藏するのである。

又其卵巢よりは珍貴の食品たる鱸子を製するのである。

▲鱸子(臺灣名)魚子。からすみ

鱈子は鱈の卵巣から製するのである、其卵粒は至て細いものであるが、其卵巣は無数の卵子を包容して頗る大い、就中「めなだ」一名「朱口」又は「あかめほら」と稱するもの、卵巣を一番大なりとして居る。

鱈子は鹿港以南一帯の海岸にて産するのである、其製法は鱈の獲期たる十二月上旬より三ヶ月間、鱈を獲るに随て製するのである、先づ雌鱈を獲るや、脊より刀を入れて卵巣を出し、其のまゝ鹽を加へて桶に漬込み、鹽の溶解するを待ちて取出し、板に並べて四五日日光に乾かせばそれでよいのであるが、尙ほ上品を製するには薄鹽水に一晝夜も漬置き、乾かす際に形状を整ふるを要すといふ、斯くの如くして此の珍重なるからすみは出来るのである。

る、そしてからすみの名は其形唐墨に似て居るから付けたのである。からすみは内地にもあるが、甚だ少ない、本島にては鹿港以南所々にて出来るが、段々南に行くに従つて品質が落ちるというて居るなせかといふと、鱈は寒くなるに随つて暖を追うて南に行くので一番此の鹿港で獲れるのが一番早い、早いに随つて子が小さいから上品が出来ることが段々南に行く中には、子が段々大きくなるから随て製品が落ちるのだと土人等はいふて居る。

植物

▲たうをがたま (臺灣名) 含笑花 (科名) 木蘭科

○花 植物 ▲たうをがたま

含笑花の葉は山茶花の葉に似て稍小さく、花は茶の花に似て稍大なる半灌木である、總ての點に於て山茶花の稍小柄なるものと見れば大差はないのである。

花は丁度象牙細工の如き白蠟色の六個の瓣より成る花で、少し淡黄色を帯びて居る、花瓣のあまり厚硬なるがために十分に開得ず、開いたと思ふとすぐ落ちて仕舞ふ、開いたとても餘り見榮えはな
いが、芳香の酷烈なるを以て愛玩されるのである、含笑の名亦之れがために出来たのである、土人婦女亦之れがために好で簪となすのである。

▲紅竹 (臺灣名) 紅竹 (異名) 千年木、鐵樹、朱蕉、朱竹 (科名) 百合科

紅竹は略ぼ竹に似て長大なる暗紅色の枝頭葉を簇生する小灌木である、其表裏滑澤にして、且つ全體血色を帯ぶるが故に此名を得たのである、尙ほ幹部に明了なる關節を有するも亦其名を得るの一原因を爲して居るのである、鐵樹といふは、其幹の鐵色に取つたのであるが、稀れには、幹葉共に甚だしく青色を帯びて居るものもある。

冬季に至り、同色にして六七寸のさびしき穗狀の頂頭花を垂れるが、見るには足らぬ、唯其幹葉の紅色を愛で、園庭に栽培するのである。

▲猩々木 (臺灣名) 一品紅 (科名) 大戟科

猩々木は葉に著しき横脈を有する漸尖頭の潤葉灌木にして、其丈

一丈ばかりに達し、冬季梢頭に黄色無瓣豆の如く、而して其側面に人口状の小穴を有する奇花十數花簇生し、花梗より、長さ二三寸にして狭長なる小葉七八葉乃至十數葉を生じ、四方に開展す、此葉は即ち花瓣の代用を爲すものにして、殆ど花と同時に、若くはそれより後れて生じ、初めは青く稍長するに従て猩々紅となる、其艶麗云ふべからず、即ち花瓣進化の代表木である。

此木元來外國産にして、近ころ漸く舶載せられたものらしいが、挿木繁殖法の容易なるがため、今や全島至る所に栽培せられ、殆ど本島原産の看あるを以て、暫らく本島産植物の一として此處に掲げて置く。

▲蒲草《臺灣名》通草トシヤウ《異名》通脱木、紙八手《科名》五加木科

蒲草は本島山地に自生する木本で、一莖直上して丈餘に達す、葉掌狀に分裂し、長さ葉柄を以て、莖頭に簇生するのである、葉の形は八手の形にしてやゝ大なるを異なりとするばかり、花は冬に至りて、頭上に獨活の如き、淡黄色の復繖形花序花を着けるのである、莖部は軟かにして、内に純白の髓を有す、此髓を薄く削りたるものを蒲草紙と云ひ、造花其他の細工物原料にするのである、是亦一種の山地趣味植物である、其髓よく通脱するが故に通草といふので、其字も元は通草と書したのであるが、通草ではアケビと混同するの弊あるを以て今は内地人は蒲草と書するのである

腦灶築くに此坪よけん蒲草花

一 叭

蒲草の目量り束や換番所

林 左

▲さとうきび (臺灣名) 甘蔗 (異名) 竹蔗、紅蔗 (科名) 禾本科
 甘蔗の葉は細長くして尖り、堅き平行脈を有し、長さ三四尺に達す、莖は外形や竹に似て明了なる節を有し、高さ十餘尺に達する多年生植物である、總ての點に於て芒に酷似して居る。
 幹に青紅の二種あり、其青色なるものを竹蔗と稱し、紅色なるものを紅蔗といふ、何れも砂糖製造の原料に栽培せられるのであるが、冬春の間は果物の代用として盛に食料にもする、其中紅蔗は多く食料に供せらるゝのである、之れを食するに、料理に付けるのは皮を剥き一寸位に切つて用ひ、普通は一尺位に切つて、端から噛る、液がなくなれば其壳を吐き出す、だから甘蔗を喰つたあとには皮や壳が狼籍して居る。

青年等はよく甘蔗店の前で削蔗戯と云つて、皮剥用の庖丁を借りて、甘蔗削競技をして居る、亦本島特殊の風俗である
 今では本島種の外に外國種も澤山來て居るが、糖分が多いといふだけで、外形上何等の差異を認めない。

甘蔗戯の刀折れ損や冬の庭

紅 竹

臺灣歲時記終

明治四十三年六月十日印刷
明治四十三年六月十日發行

臺灣歲時記與付
定價金五拾錢

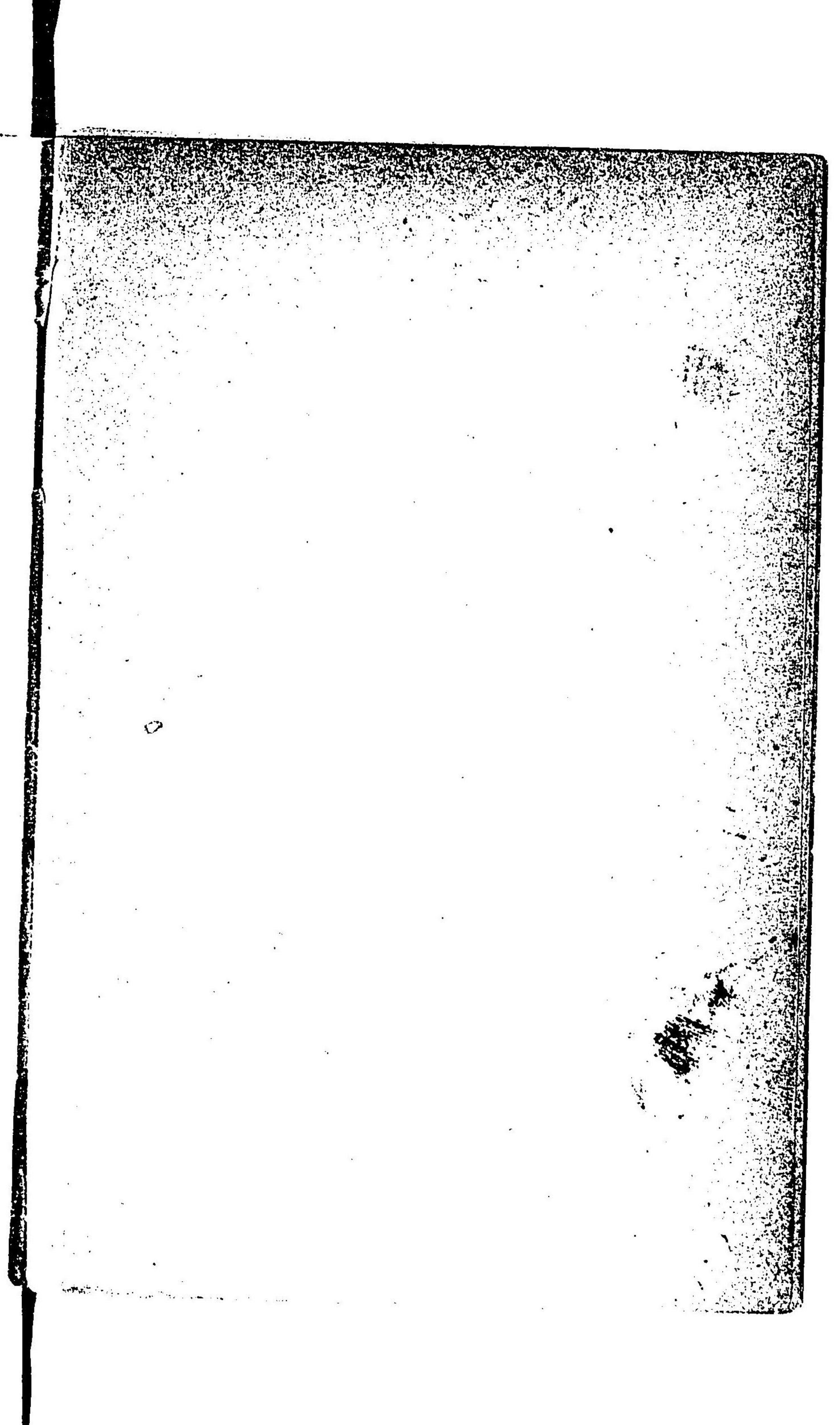
著者兼發行所 臺灣臺北府東門街丙七號
小林里平

印刷者 東京麹町區飯田町二丁目六十八番地
遠藤廉治

印刷所 東京麹町區飯田町二丁目六十八番地
公木社

版權所有

發行所 東京市四谷區愛住町
振替口座東京壹八四四番
政教社



29
585

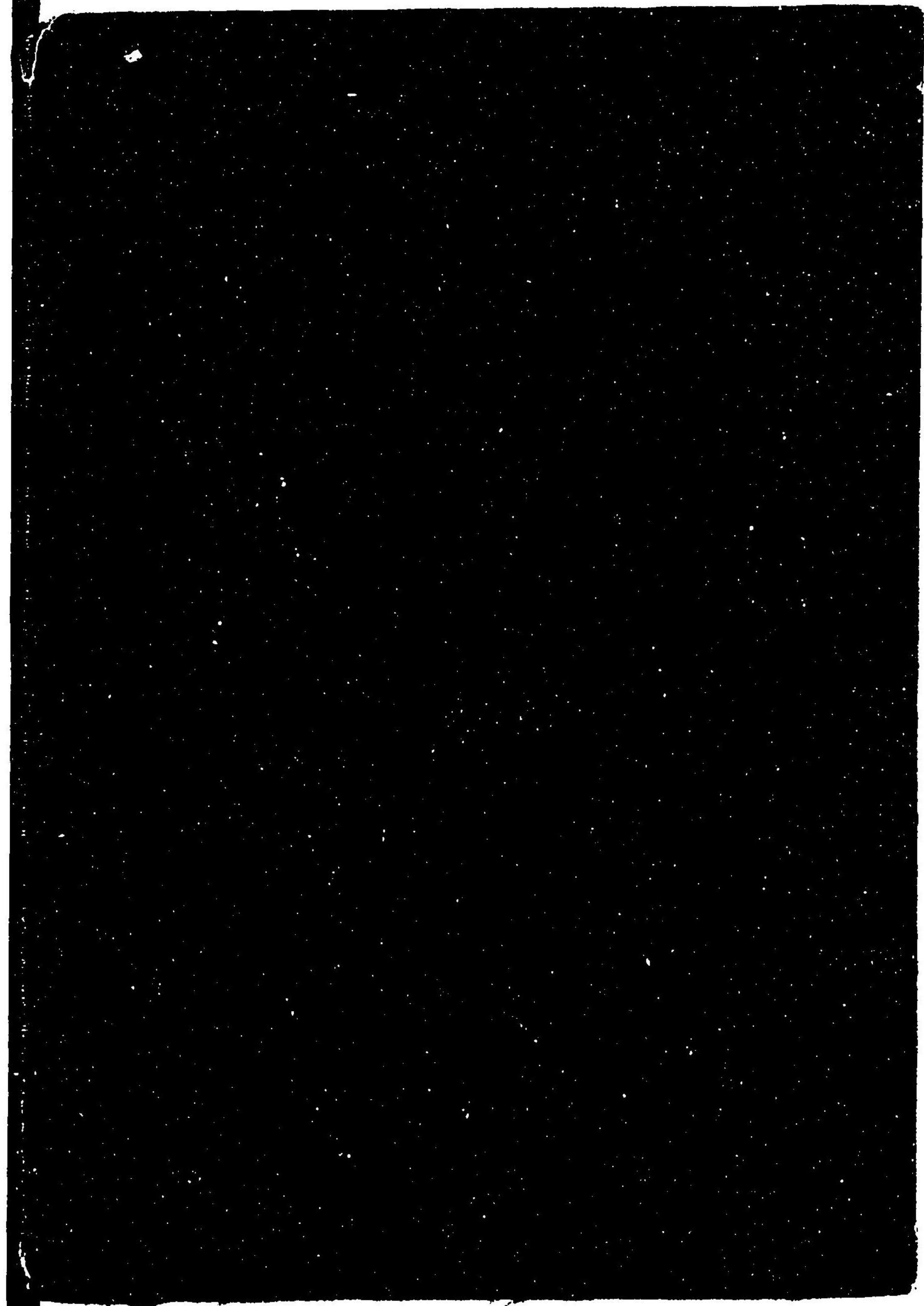
v

v v v

v v

222

X



29
333

Ⓜ

027357-000-2

29-333

台湾歳時記

小林 里平/著

M43

ADJ-0113



